令和4年度
西宮市　認知症地域支援推進員活動報告

認知症地域支援推進員について

１　認知症地域支援推進員：２名

令和３年度から“認知症つながり推進員”の通称で活動中

２　認知症地域支援推進員の役割

（１）認知症の正しい理解と支援方法等に関する周知・啓発

・認知症研修会、事例検討会の開催

・認知症早期発見・対応啓発講座、あったか見守り声かけ講座の動画配信

（２）認知症の人を支援する関係者との連携

・包括、医療機関、家族会、社会福祉協議会などとの連携

・認知症疾患医療センター、認知症初期集中支援チームとの情報交換・ケースの共有

（３）地域の実情に応じて認知症の人や家族を支援する事業の実施

・認知症カフェの立ち上げ・継続支援

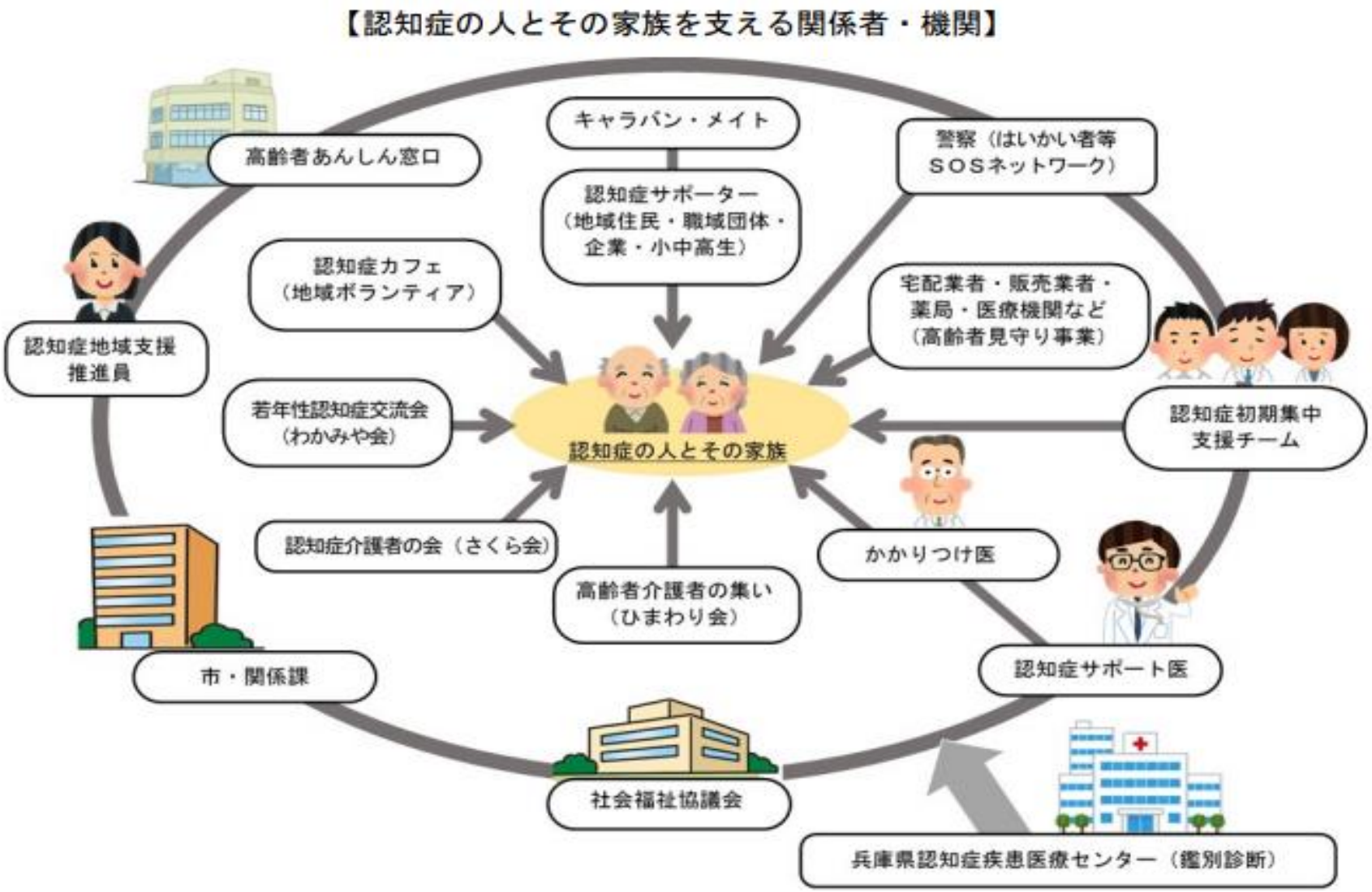
・若年性認知症交流会『わかみや会』の開催

・若年性認知症の人と家族への個別支援

・認知症ケアパス（全市版）の作成協力

報告者氏名：地域共生推進課　西本麻依子
認知症地域支援推進員　後藤香織・齋藤環

西宮市　認知症施策全体図



標題：

誰もが「認知症であってもなくてもともに生きていくパートナー」へ
～認知症サポートべんり帳と認知症サポーター養成講座副読本を通して～

認知症サポートべんり帳
（西宮市版認知症ケアネット）以下べんり帳

① 作成のきっかけ

平成２７年度に初版作成。当初から更新していくこと決めていた。数年経過し、社会資源の多様化や、本人発信の重要性を強く感じ、令和３年度にリニューアルし、令和４年度から本格的に普及を進める。

② 主に手に取ってもらいたい対象

認知症のことが気になる人、認知症の診断を受けた人、認知症の人を介護している人、認知症に関心がある全ての人。

③ 伝えたいこと

認知症であっても自分らしく生活していけることを知ってもらい、それを実現するための心の持ち方や、どのように行動していけばいいのか、認知症への対応などの“備え”を具体的に伝えたい。

認知症であってもなくても
ともに生きていくパートナーのためのテキスト
（認知症サポーター養成講座副読本）以下副読本

①　作成のきっかけ
　標準テキストを補うものとして、西宮市の認知症への考え方や社会資源を掲載した副読本が必要と感じた。本人がサポーターに望むことなどもしっかり伝えたいと考えた。

②　主に手に取ってもらいたい対象
　認知症に関心がある全ての人。
（認知症サポーター養成講座だけでなく、幅広く様々な場面でも活用できる物として作成）

③　伝えたいこと
　サポートする側、される側ではなく、認知症の人も、そうでない人も“共に生きる仲間”であり、このまちのつながりの中で生きていくパートナーであることを伝えたい。

作成に当たって大事にしたこと

① 本人の想いを知ってもらう
② 認知症を前向きにとらえてもらうのに役立つ
③ 認知症を自分事、みんな事と考え、受け入れられる自分になっておくことが最大の認知症への備えであることを伝える
④ 冊子を読んだ人が、認知症とともに送る生活を具体的にイメージできるようにする
⑤ 認知症予防の考え方を理解してもらう

↓

認知症観を変える

↓

自身で行動できる人、仲間として活動する人を増やす

↓

共生のまちへつながる！

工夫したところ①　市、社協と一緒に協議

効果 ①

✓べんり帳や副読本を通して、市として市民に何を伝えなくてはならないかが明確化しただけでなく、認知症観がすり合わさった。

✓今後市として、認知症施策を進める**主題**が明確化し共通認識ができた。

➡**主題**は「認知症であってもなくてもともに生きていくパートナー」

✓方向性やそれぞれの役割も明確になり、心を一つにして取り組めるようになった。

工夫したところ②

- **本人の想いは若年性認知症交流会“わかみや会”でインタビュー**
- **家族の想いは認知症介護者の会“さくら会”や“わかみや会”で確認**

効果 ②

✓特にわかみや会でのインタビューは本人ミーティングの場となった。

✓本人の声を掲載することで本人発信の場にもなった。

工夫したところ③

- **べんり帳では…**
  認知症であっても自分らしく生きている人の共通点を紹介
  認知症とともに自分らしく暮らせるイメージをみちしるべで紹介
- **副読本では…**
  わかみや会家族からの手紙も掲載
  サポーターが理解者・見守る人から一歩踏み出し、何らかのアクションを起こすきっかけになるように作成

効果③

～べんり帳や副読本を手に取った人からの言葉～

認知症になっても地域の中で暮らしていけるんですね。

他市でしているNPOの活動で紹介したいです。

認知症になってもやっていける自信がつきました。

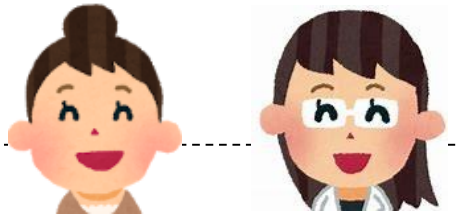
課題

➢ 市としての考え方はまとまったがそれを如何に広げるか

- 広げる機会、広げる担い手の確保。
- べんり帳は配布するだけでなく、その内容の意図もしっかり伝えなくてはならない。
- 副読本はキャラバン・メイトにしっかり理解してもらい、正しく伝わる様に、活用してもらわなくてはならない。
- 今後、再更新も必要。

➢ チームオレンジ設置に向けて

- 現在チームオレンジ設置に向けて、“認知症であってもなくてもともに生きていくパートナー”を合言葉に、当事者、活動者、市、社協、推進員などで検討しており、しっかり形にしていきたい。



- 最後に・・・

当事者の想いを出発点に、誰もがその人らしく生活できるよう推進員としては人と人つまり、心と心をつないでいきたい。人と人をつなぐ相乗効果を感じるとやりがい200%増しです！

認知症を切り口に活動していますが、目指すところは“誰もが自分らしく暮らせる共生のまち”です。みなさんも、私たち推進員もパートナーの一人として、そんなまちを一緒につくりあげていきましょう！！